



しゅららん

それは、しゅららん、と言うが、それはそのようなので、私たちにはよくわからない。
わかるのは、兄だ。とうに四十も過ぎたはずなのに、わけのわからないことばかり言っている。
「知っているか」と、言う。
「しゅららんが、降り注ぐ」

そう言いながら、兄は二階のベランダで黒い空を見上げている。長く伸びてしまった髪の毛が冬の風に吹かれてふらふらと揺れている。相変わらず風呂にはあまり入ってはいないようだ。白髪混じりの髪の毛の間に大きなふけが散見された。そこに鋏を入れる。夜に切るのはよくない、と私は言うが、きってほしい、と兄は言う。鋏を通じて兄の固い髪の毛が断たれる感触が指先に残る。私が切った髪の毛は風に乗る、どこか、空に消える。

兄は、私の兄ではない。しかし、やさしい兄だ。他人のために涙を流し、流し続け、他人と競うことを避け、避け続け、誰にもわからない袋小路に迷い込んでしまったように私には見える。知り合ったのは二年前の飲み屋でだ。仕事で些か面白くないことがあり、一人でつまらぬ酒をあおっていると、いた。こぼれるように落ちた私の話を聞きながらどうでもよさそうに笑ったり、涙を滲ませたりしながら実に旨そうに酒を舐めていた。兄者、と酔った私は一回りは歳上のその男に向かって言った。その日、私は生まれて初めて酒で記憶を失った。翌日、兄の家で目覚めた私は、それからたびたびそこに訪れるようになる。兄は両親の死後、一人で実家に住み着いているようだった。兄弟もなく、一人きりだった。そこは風が吹くたびに震えるような、古い木造家屋だった。家の中は鉄の焼けたような匂いがした。

しゅららんは、私にはわからないし見えない。しかし兄はたびたびその名を言う。名、と私は思う。それは本当に名、なのだろうか。それって、いったいなんだ、と問うても、兄は答えない。

「知っているか」と言う。
「しゅららんが、降り注ぐ」

私に見えるのは風に流れる兄の白いふけとひどく頼りなさげに光る星だけだ。
私たちは時折食卓を共にする。兄の料理を私は気に入る。わけのわからぬことばかり言う割りに兄の料理は旨いし、なんと言うか愉快だった。愉快だし、笑えた。どうしたらそんなことを思いつくのだろうか、という驚きがいつもあった。尋ねてみると、レシピに従っているのではないようだった。

「だから、再現は不可能」と、笑う。
兄は、特に働いていないようだった。遺産やその他を食い潰しながら働きもせずに、絵を描いていた。絵の具も使わずに、鉛筆と赤いボールペンだけで、スケッチブックや家中に散る紙切れに何か必死に線を重ねていた。それは、ある一定の志向性を持っているようには見えたが、何処に向かっているのか、美術に不明な私にはさっぱりわからなかった。あるとき、兄は画家なのか、と尋ねてみるが、それは違う、と否定された、これは職業ではない、と言う。これは、自分の生きる、なのだ、と。それを私は理解する。言っていることはよくわからないのに、私はそれを理解できる。兄の描く線は、兄が精一杯あくびをするときのように伸びたし、眠りながら震えるときのように震えたから。

二階のベランダからは桜が見える。家の前の小さな公園に中々立派な八重桜が生えており、私たちはよくそれを眺めながら酒を飲んだ。花はまだ咲いていなかったが、それでも、花見だ、と言って兄は喜んだ。爪を立てるような空気が肌を搔く中、私たちはグラスを傾けた。その日は、私が差し入れた酒を飲んでいて、明け方に吹く風のような名前の酒だ。

「これはうまい酒だ」と、兄は言う。

「いいでしょう。少し値は張りますけどお気に入りなんです」

「さすが弟だね。うまい酒はいいね」

「いいですよ。うまいお酒があれば、だいたいいいですよ」

「うん、いいな。でも、それだけはいやだな」

「それだけ？」

「うん、全てが素晴らしいものだけじゃあ、つまらん」

「そうですか？私は全てが素晴らしいものだけなら、それがいいな」

「そりゃあ、つまらん。つまらんよ、おれはいやだね」

「そうですか？」

「そうだよ。そんなあぶくみたいに生きるのは、おれはごめんだね」

兄は、それからしばらくして、あぶくみたいに消えた。私がいつものように仕事終わりに適当に購入したつまみをぶら下げて玄関を叩くが、一向に応答がない。訪れた際に中で震えながら寝ている、ということはよくあったので、その時するように勝手に玄関を開け上がり込むもその姿はない。一階にも、二階にも、兄はいない。珍しくどこかに出かけているのかもしれない、とその日はそのまま一人で酒を飲んだが、次の日も、その次の日も、その次の次の日も、兄はいなかった。

一週間後の夜、私はその紙に気づく。一人で酒を舐めながら兄のいない紙片だらけの部屋を漁っていると、不意に私の名前が書かれた紙を見つける。私の名前と、あと人の輪郭らしきものが描かれている。それは黒と赤の線で塗りつぶされていて、影、とも思うが、あるいは私の輪郭かもしれない、焼け焦げて笑う私かもしれない。なんとなく頭部を表現しているであろう部分には歪な半月状の空白が見える。私はその紙をベランダとの先のガラス戸にセロテープで貼り付ける。それはガラス戸に差す街灯の光を透かし、薄暗い部屋に白く浮かび上がった。それは兄のような線でありながら、私の輪郭でもあるようだった。

数日後、再び酒を下げて兄の家を訪れると、女性がいた。初めて見る女性だった。歳の頃は兄と同じくらいだろう。基本的にだらしない印象だった兄と比べ、随分ときちんとした人間に見えた。

「あら」と、言う。雲のように柔らかな声だ。

「どなたかしら？」

「...弟...です」

「ああ、あなたね。話には聞いているわ」

「あ、あの」

「ああ、わたし。わたしは友人です...古い...そうね、古い友人ね」

その女性は兄の古い友人で、社会性に乏しい兄の面倒を色々みていたようだった。税金や遺産の管理から、時には兄の絵の営業までしていたようだった。あんな絵だけどね、時々お金になるのよ、と雨が降るようにして笑う。それから我々は夕食を共にする。女性が作ってくれた料理を、食べる。女性の料理は兄と違い非常にオーソドックスなものだったが、旨かった。

「兄は何処にいったんでしょう？」

「わからないわ。あの人、ときどき、消えちゃうのよ」

「ときどき？」

「そう。最近は五年前ね。そのときは二年帰ってこなかった」

「今度もそれくらい帰ってこないんでしょうか？」

「もう、帰ってこないかもね」と、笑う。「帰ってきそうに思う？」

「帰ってきて欲しいとは思いますが」

「なんだか、たまたま、って思うの」

「たまたま？」

「ええ。あの人は、たまたま、ここにいて、たまたま、ここにいないんだって。だから帰ってこなくても驚かないわ。いつもそう思う」

それから、二階へ行き、酒を飲んだ。女性はグラスを片手に兄の線が描かれた紙片を一枚一枚確認していった。金になりそうな絵を見繕っているのだと言う。床に散った紙を一通り確認し終わると、ふと顔を上げ、ガラス戸のほうに目を遣る。

「あら、あの絵」

近づいて、剥がす。

「これ、あなたね」

「わかりません」

「名前が書いてあるじゃない。そうね、きっと、あなたの影ね。笑っているのかしら。」

女性はしばらく酒を舐めながらその紙を眺めていたが、やがてガラス戸に戻した。

「これは、ここにあるのがいいわね」

そう笑う女性の唇に朝露の色に似た酒が光る。

いつだったかの休日、兄がガス料金を払い忘れ、風呂に入れない、と嘆くので近所の銭湯に行ったことがあった。まだ陽が赤く落ちる時分に赴き、共に浴びる湯は浴場の人気のなさもあり不思議な充足をもたらした。兄の腹には三本の皺があった。

その、帰り道だ。ふらふらと歩く兄の後ろを歩いていると、ある、道に出た。車も通れぬような狭い道だったが、薄暗がりの中、白く浮かび上がっている。脇に並ぶ八重桜の花びらが落ち、道を埋め尽くしていた。花びらは落ち続けている。それは、流れる、とも思うし、止まる、とも思う。その道を歩く我々の肩に乗り、頭髮に絡まる。

私が何度も思い出すのは、その光景だ。

それから、あれから、兄が消え、兄はまだいない。

「しゅらん」と、私は言う。

「え？」

「しゅらん、と兄が」

「ああ、あれね」

「ご存知ですか？」

「ええ。聞いたことはある。でもわからないわ。」

「降り注ぐ、と」

「え？」

「降り注ぐ、と、そう」

「ああ、そうだったかしら」

「はい。言っていました」

「そんなことばかり言っていたわね」

「ええ。わけのわからないことばかり。でも、降り注いでいればいいと思います」

「何が？」

「しゅらん、です」

「わけが、わからないのに？」

「わけがわからないし、見えないですけど、でも、どこかに兄がいるのだとして、その目にそれが映って、降り注いで、いれば、いい、と、そう、思います」

私は自分が何を言っているのかを見失いながら、それを言い終えた途端に眠りについた。酒を少し飲みすぎていたのだった。

その夜、夢を見た。私はベランダで兄の髪の毛を切っていて、ベランダはしかし二階ではなく、何故かもっと高層にある。真夏、と思う。兄は服を殆ど着ておらず、空高く昇った太陽から白い光が落ち、私は首の周りと脇の下に汗を掻いている。風が吹いて、汗に濡れた皮膚が震える。毛は、その風に乗って、流れるように広がる。根、と私は思う。それは根を張るようにして、目の前の街に落ちてゆくのだと思う。私は髪の毛の行く先に思いを馳せる。それはある木の根元に落ちる。髪の毛はやがて溶け、土と混ざり、木に吸収される。それはある鳥の羽に混ざり、飛ぶ。それはある犬の口に入る。犬は違和感を覚えながらもそれを飲み込み吸収し、それはやがて犬になる。それはある人間の衣服に付着する。大体の人間はそれをはたき落とすことが出来るが、一部の人間はそれを家の中に運び込んでしまい、それでも大方の人間はそれを床に落とすことが出来るが、一部の、ほんのごく一部の人間は誤って口に入れてしまう。そしてそれは吸収される。兄はそうして、人に為り、犬に為り、鳥に為り、そして木に為る。

木だ。

根から吸い上げられた兄は幹の内側を昇り、枝を渡り、やがてその先に実る。季節が、と言う。季節が巡る。巡り、その先に開く。

兄が。

何色、と言うだろう。それは。落ちるときの陽に似ている。そしてまた巡り、乾き、落下する。枝から離れ、流れる、とも思うし、止まる、とも思う。私はあぶくを思い出す。そして、誰かの肩に落ちる。誰だろう。鉛筆で塗りつぶされて焼け焦げたような輪郭をしている。それが誰か思い出せそうな気もするが、全く思い出せない。

そして、はじけた。

全部。

全部はじける。

翌朝、私は毛布に包まれており、咽喉の渇きと共に目覚めた。窓から差す日差しが肌をじりじりと焼いている。はめたままの腕時計を眺めると、短い針は上のほうを指していた。階下に降り、水を二杯飲む。食道の輪郭が露になる。女性の姿はないが、洗われた食器は確認できた。私はその日、仕事を休んだ。洗面所で顔を簡単に洗い、酒の瓶を片手に家を出る。玄関の引き戸は高い音を立てて閉まった。

太陽は高く、真っ白い光が眼球に突き刺さった。だから、私の眼球からは涙が垂れる。私は正面の公園に備え付けてあるベンチに腰掛け、手にした酒をあおった。明け方に吹く風のような名前だ。もう、昼過ぎなのに、と私は笑う。咽喉が焼けるのを感じながら、見上げると強い影の中に大きな桜のつぼみが、開こうとしていた。

そうして暫く座っていると、陽が落ちる。私はその日も兄の家に泊まることにした。兄がしていたように料理をしたが、味は似ても似つかなく、面白くもなんともなかった。食べ終え、酒を片手に二階へ上がる。ガラス戸に貼りつけられた絵が、浮かぶように光っている。私は瓶を傾けながら、それを剥がした。剥がし、破りながら、ガラス戸を開け、そのまま放った。

「しゅららん」と、言う。

私にはそれはわからないし、見えないが、それでも、言う。

「しゅららん」と、言う。

どこかで降り注いでいればいい、と言う。

紙切れは幾つにもわかれ、揺れながら夜に落ちていく。掃除は翌日すればいい、と思い、その日はそのまま、寝た。夢は見なかった。よい夜が、よい終わりが訪れたのだと思った。